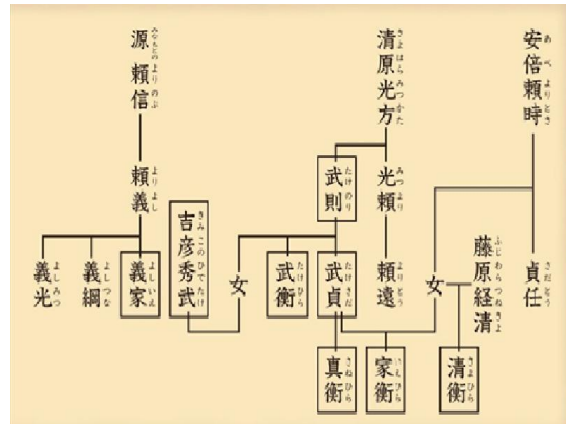


岩手の風土記シリーズ（36） 『前九年の役』

東北の歴史をさかのぼっていくと、必然的に「前九年の役」と「後三年の合戦」に行きつくと思う。平泉の文化が開花する前の時代である。この内容は高橋克彦著の「炎たつ」でNHKの大河ドラマとして1993年に放映されたので、知っている方も多いと思う。まずは「役(えき)」と「合戦(がっせん)」の

違いは何かを補足しよう。「役」はその時の国家を統制していた朝廷への反乱を言う。そして「合戦」は朝廷には関係ない私的な争いをさすようだ。従って前九年の役は対朝廷に対する反乱、後三年の合戦は単なる地方の私的な争いという事になる。さて、今回は「前九年の役」を、少し掘り下げてみたいと思う。平安時代後期に、陸奥の国で起こった豪族による反乱を、朝廷から派遣された「源頼義」・「源義家」親子が平定した戦いのことである。これは朝廷側(勝者)を主体とした表現である。見方を変えれば、侵略者(朝廷側)に対する地元反乱軍の抵抗の戦いであったと言える。(坂上田村麻呂とアテルイ達の戦いと同じである)。そして主な登場人物は、藤原登任(ふじわらのなりとう)、源頼義、義家の親子、清原光頼、武則の兄弟、片や反乱軍は阿部頼時、貞任の親子、藤原経清(藤原清衡の実父)といったところであろう。そして舞台となったのが、現在の岩手県にあたる「奥六郡」(胆沢郡、江刺郡、和賀郡、



【登場人物の相関図】

頼義」・「源義家」親子が平定した戦いのことである。これは朝廷側(勝者)を主体とした表現である。見方を変えれば、侵略者(朝廷側)に対する地元反乱軍の抵抗の戦いであったと言える。(坂上田村麻呂とアテルイ達の戦いと同じである)。そして主な登場人物は、藤原登任(ふじわらのなりとう)、源頼義、義家の親子、清原光頼、武則の兄弟、片や反乱軍は阿部頼時、貞任の親子、藤原経清(藤原清衡の実父)といったところであろう。そして舞台となったのが、現在の岩手県にあたる「奥六郡」(胆沢郡、江刺郡、和賀郡、



【当時の勢力図】

紫波郡、稗貫郡、岩手郡の六郡の総称)である。この奥六郡一帯は、「陸奥国」(むつのに:そこに住む部族を、「蝦夷」(えみし)と呼んでいた)平安時代の奥六郡以北の地は、まだ日本の統治が及んでおらず、中央政権から見ると、朝廷に従わない異民族として捉えられていた。朝廷はこの奥六郡を統治下に入れようと、陸奥国で強い力を持っていた土着豪族の安倍氏に、奥六郡の統治を任せた。しかし、統治を任せられた安倍氏は、次第に朝廷の言うことを聞かなくなり、兵を駐屯させる軍事的拠点として奥六郡の外側に城柵を設け、「受領」(地方官)への納税も怠るようになるなど、安倍氏が奥六郡を支配するようになってきた。この安倍氏に対し、陸奥国守であった「藤原登任」

(ふじわらのなりとう)が、「賦貢(こうふ)しない」などの理由により、出羽国(現在の山形県)の国司だった「秋田城介」(あきたじょうのすけ)と「平重成」(たいらのしげなり)とともに挙兵し、1051年(永承6年)、玉造郡鬼切部(現在の宮城県大崎市)で、藤原登任軍と安倍軍による「鬼切部の戦い」が起こった。これが、前九年の役の始まりとなる。この鬼切部の戦いでは、「安倍忠良」の息子「安倍頼良」(あべのよりよし)による待ち伏せ戦略に嵌り、朝廷軍は大敗を喫し、安倍氏の圧倒的勝利に終わった。朝廷からその責任を問



【阿部氏の城柵】

われた藤原登任は、陸奥守を解任され、その後任として、公家ではなく、武家の源頼義が任命された。源頼義は、関東地方で起きた「平忠常の乱」を平定した英雄「源頼信」の息子であり、平忠常の乱では、父と一緒に活躍をしたことから、当時世間に広く知られていたスーパースターであった。1051年(永承6年)に陸奥守に着任、翌々年には「鎮守府将軍」も兼任することになり、以後安倍氏と対峙することになっていった。源頼義の陸奥守着任後まもなく、「後一条天皇」と「後朱雀天皇」の生母である「上東門院 藤原彰子」が重篤な病に陥る。その弟であった源頼通と源教通らは、病氣回復祈願のため「大赦」を奏請(そうせい:天皇に申し上げて許しを請うこと)した。これによって、安倍頼良が朝廷軍を撃退した罪も免罪となり、前九年の役が一時停戦となった。この頃、「奥六郡」の俘囚長(ふしゅうちょう:陸奥や出羽の蝦夷のうち、朝廷の支配に属する者)であった安倍頼良は、朝廷に対して恭順の意を示すようになり、また将軍の「頼義」と同音であるのを恐れ多いとし、自ら「頼時」に改名したと言われている。源頼義が陸奥守兼鎮守府将軍を務めている間、安倍頼時も税を納めるようになり、源頼義を饗応するなど、ひたすら恭順の意を示していた。しかし、源頼義の陸奥守としての任期が満了する1056年(天喜4年)、源頼義は、鎮守府の「胆沢城」で任務を引き継ぎ、国府の「多賀城」に向かう途中、阿久利川(あくとかわ)のほとりで野営した際、部下であった権守「藤原説貞」(ふじわらのときさだ)の子「藤原光貞」の野営に何者かが乱入し、夜襲を受けるという事件が発生した。源頼義が心当たりのある犯人を尋ねると、藤原光貞は、「はっきりとは分らなかったが、先年、安倍貞任(あべのさだとう:安倍頼時の息子)が、私の妹を嫁に欲しいと言ってきたが、卑しい俘囚だったため断りました。きっと安倍貞任の仕業に違いありません」と告げた。これを聞いた源頼義は、安倍貞任に出頭を命じるが、安倍頼時が「一度罪を許され、服従しているのになぜそのようなことを

しょうか。もし攻め入ってくるようなら、私達は死を覚悟で徹底抗戦する」としてこれを拒否。源頼義は、安倍氏「謀叛」と朝廷に報告し、再び戦が始まることとなった。(ただし、この「阿久利川事件」には陰謀説がある。安倍氏側には、任期の切れる源頼義を討つ理由がなかった。そのため、陸奥国の支配権を狙っていた源頼義が、夜襲をかけられたとして挑発したのではないかとする説と、藤原説貞(光貞、元貞の父)など反安倍氏の在庁官人による謀略説などがある。1056年(天喜4年)8月、「安倍頼時追討令」が発令され、前九年の役の、戦いの火蓋が切って落とされた。源氏軍には、関東武士団や地元の豪族も参加しており、その中に、安倍頼時の娘婿である「平永衡」(たいらのながひら)と「藤原経清」(ふじわらのつねきよ)がいたが。平永衡は安倍氏への内通を疑われ、源頼義に斬殺された。これを見た藤原経清は身の危険を感じ、「安倍氏が奇襲を図り、源頼義以下の妻子を襲う」と流言を放ち、混乱に乗じて安倍軍に寝返った。安倍軍に加わった藤原経清の参戦により、安倍軍は朝廷軍を苦しめることとなった。その後、源頼義と安倍頼時の一進一退の攻防が続き、不利な戦いを余儀なくされた源頼義は、「夷は夷をもって制す」(他国同士を戦わせて

自国の利益を得る)として、現在の岩手県北部から青森県東部にかけて勢力を持っていた「安倍富忠」を味方に引き入れることに成功したのである。安倍頼時は、他の蝦夷が源頼義側に付かないよう阻止しようとはしますが、安倍富忠のもとへ説得に向かった

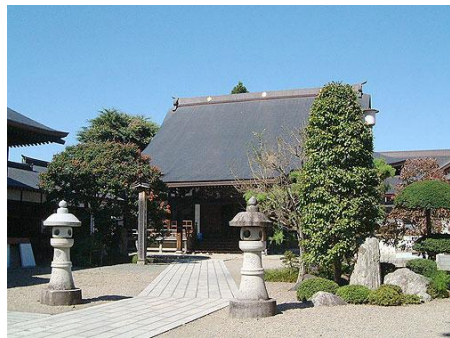


た安倍頼時を安倍富忠の兵が不意打ちに急襲し、奮戦の中で流れ

【黄海

の合戦古戦場跡】 矢にあたった傷がもとで1057年(天喜5年)7月26日に安倍頼時は死去した。しかし、この安倍頼時の死は、安倍氏の団結を強固なものにし、息子の安倍貞任に総大将が代わってからも、戦いは5年間続くこととなった。1057年(天喜5年)11月、「黄海の戦い」(きよみのたたかい)が起こる。源頼義は陸奥国府から出陣し、安倍貞任に決戦を挑みた。安倍貞任は河崎柵に兵力を集め、現在の岩手県一関にあたる「黄海」(きのみ)の地で源頼義軍を迎撃。冬期の遠征で疲弊し、補給物資も乏しく、兵力でも劣っていた源頼義軍は大敗を喫した。源氏軍は数百人の兵を失い、一時は「源頼義討ち死に」と伝えられたほどだったが、この窮地を救ったのが、嫡男の源義家だった。「八幡太郎」(はちまんたろう)の愛称で知られていた源義家は、文字通り獅子奮迅の活躍を見せ、父・源頼義とわずかに残った兵と共に、安倍軍から逃れることが

できた。黄海の戦いの敗戦により、自身の持つ兵力に痛手を負った源頼義であったが、数年を経て、陸奥守の任期が再度終わり、のちに再々任されることになると、安倍氏と並ぶほどの権力をもった出羽国の俘囚「清原光頼」に味方になるよう接近。源氏方に加担することに対し、なかなか首を縦に振らない清原氏だったが、源頼義が贈り物を送るなど、三顧の礼を尽くし、ついには味方とすることに成功した。強大な力を持つ清原光頼を味方に付けたことにより、これまでの安倍氏有利の状況が一転。清原光頼の弟「清原武則」が総大将となり、10,000余りの軍勢を率いて、安倍軍に対し果敢に攻め入り、「小松柵の戦い」や「衣川関の戦い」を次々に勝利し、安倍氏終焉の地となった本拠地「厨川柵」へ追い詰め、安倍貞任を打ち破ったのであった。1062年（康平5年）9月17日、厨川柵（盛岡市天昌寺町）と、蠣戸柵（盛岡市安倍館町）が陥落、総大将の安倍貞任は戦で負った傷のため、命を落とした。朝廷側より寝返った藤原経清は、苦しみを長引かせるため、わざとなまった日本刀での斬首刑となった。これにより、1051年（永承6年）から1062年（康平5年）の長い前九年の役は、ようやく終わりを迎えたのであった。康平5年12月17日（1063年1月19日）頼義は騒乱鎮定を上奏。康平6年2月25日（1063年3月27日）に頼義は「四位上臈」と呼ばれる受領の最高峰であった正四位下伊予守となった。



これは朝廷が頼義に対して最大級の功績を認めたこととなる。阿部貞任の弟宗任らは伊予国、【天昌寺(引用写真)】後に筑前国宗像に流された。一方清原武則はこの戦功により朝廷より従五位上に加階(武則は元から従五位下であった為)の上、鎮守府将軍に補任されて奥六郡を与えられ、清原氏が奥羽の覇者となったのである。経清の妻であった頼時の息女は夫と兄の敵として戦った武貞と再嫁し、経清の遺児(後の藤原清衡)共々清原氏に引き取られた。これが「前九年の役」のエピローグであると同時に、「後三年の合戦」へと続くプロローグであった。そして、平泉の黄金文化が花開いていく第一歩であったのである。

「厨川柵」は、前九年の役において、安倍貞任、藤原経清の終焉の地となった場所である。この厨川柵は現在の盛岡市安倍館町の北上川沿いの安倍館遺跡を中心はかなり広い範囲で存在したようで現在は擬定地となっている。この安倍館遺跡は江戸から明治時代までは厨川柵とされていたが、大正以降では安倍館、里館を含む広範な地域を厨川柵あるいは蠣戸(おぼと)柵とする見解が示されている。現存する遺跡は、鎌倉時代の地頭で安土桃山時代までこの地を領した工藤氏の居館で、天正(てんしょう)20年(1592)に廃城となった中世厨川城と15世紀

前半には成立していた厨川館、および城館が破却されて以降の近世下厨川村の遺構と考えられる。この周辺には、「前九年」、「安倍館」、「厨川」の地名が今でも町名として残存している。いずれにしても、昔から東北地方は蝦夷〈エミシ〉などと呼ばれ、中央政権からは卑下されていたにもかかわらず、豊かな資源（金、木炭、農産物等）に恵まれていたため、比較的自由に平穏に暮らしていた、そこに朝廷が利権欲しさに、ずかずか乗り込んできて朝廷に従えと脅し、武力で強引に従わせていった、東北人にとっては納得いかない虐げられた戦いであったと考えるのは筆者だけであろうか？最後に区界にある兜明神岳（かぶとみょうじんだけ）界限に、阿部貞任埋蔵金伝説があるそうだ。これは戦いに敗れた地方豪族の将来的な復活・再興を信じて密かに財宝を残そうとしたか、戦いの中形成が不利となった時、敵側に知られることなく資金源を確保し、奪われる前に秘匿するのが、自然の流れと考えると、この埋蔵金伝説はあながち伝説という事では済まされない、妙な信憑性を感じざるを得ないのは、筆者だけであろうか？まさに新たな歴史ロマンである。

参考資料

岩手の文化情報大事典 厨川柵

<http://www.bunka.pref.iwate.jp/archive/cs35>

盛岡市遺跡の学び館 ホームページ 阿部館遺蹟

https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/450/abetate-iseki2006.pdf

ウィキペディア 前九年の役

<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

刀剣ワールドホームページ

<https://www.touken-world.jp/tips/7031/>

情報紙 シニアズ 2024年8月号 高橋正彦著 風のうわさ